

作家
曾野綾子さん

日本歯科医師会会長
大久保満男氏



歯科医療と「生きる力」をテーマとして、作家の曾野綾子さんと、日本歯科医師会会長・大久保満男氏に、日本人が置かれている現状や、これからの社会の在り方などについて語り合っていた。

日本ほど医療環境が恵まれた国はない

曾野 北陸の田舎育ちの母に育った私は、子どものころからじやこをしやぶって生きてきました。そのおかげで今、81歳ですが、自分の歯は一本失っただけで27本揃っています。今も、好きなめざしを丸ごと食べていればこんな幸せなことはありません(笑)。

大久保 今の時代ではある意味、贅沢なことですね。

曾野 日本では普通の庶民でもそれができますから、じつに幸せだと思います。私は毎年のようにアフリカに行っていますが、アフリカの貧しい地域では30歳まで歯が全部揃っている人はほとんどいません。多くの女性は15、16歳から赤ちゃんを何人も生み、30歳頃になつたらもう歯抜けなんです。歯科に限らず、そもそも医療施設が少ないですし、病気が怪我で救急車を呼ぼうにも電話がありません。呼べたとしても医療費が現地の人々にとつて高額で、お金が払えないとわかったら救急車は有料ですから引き返してしまいます。



曾野綾子

作家。1993年恩賜賞・日本芸術院賞。1995年から2005年まで日本財団会長。2012年菊池寛賞受賞。『天上の青』『この世に恋して』など著書多数。



大久保満男

日本歯科医師会会長。8020推進財団理事長。著書に「歯科医師会からの提言 食べる―生きる力を支える」シリーズ(中央公論新社)など。

ていたら、意識がある場合は「どの保険に入っているか」をまず聞きます。あちらはほとんど公的保険がないので、医療費の支払いが問題になるケースが多いのです。その点、日本の医療制度は「フリーアクセス」で、どこで倒れても、保険がきく医療である限りは同じ費用、同じ方法で治療を受けられます。じつはこんなありがたい国はほとんどないですよ。

曾野 とてもおつらい仕事だったでしょうね。私は死体鑑別士のやり方も本で学びましたが、死を人の当然のこととして受け入れ、向き合っている方を本当に尊敬しています。

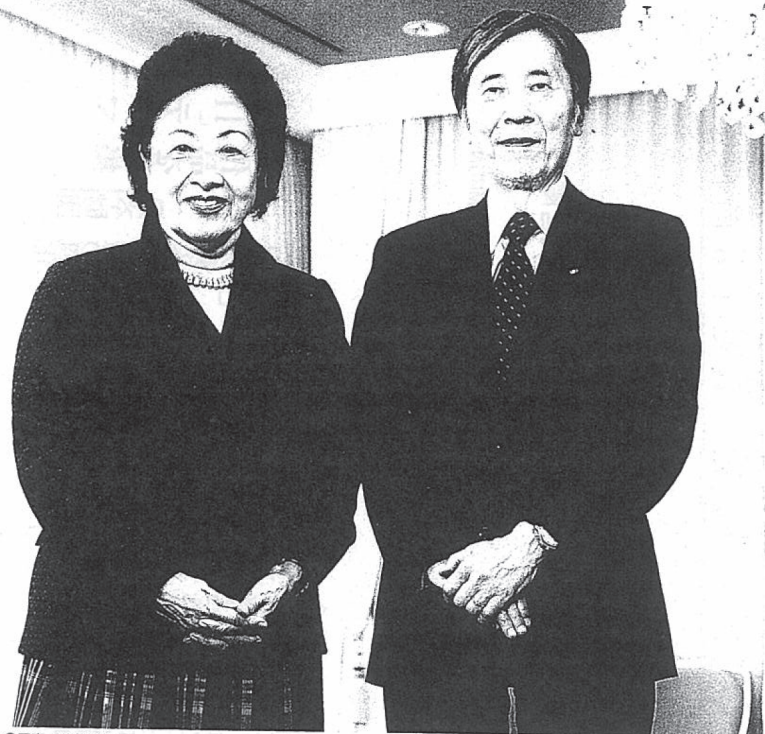
震災時に私たちが向き合ったこと

大久保 東日本大震災の話を書せていただいたのですが、震災の起きた翌日、政府から電話があり、被災地で遺体の身元を確認するための歯科医派遣を打診されました。各都道府県の歯科医師会に派遣可能な会員を募ったところ、即座に1200人の歯科医が全国から「いつでも行ける」と応答してくれました。被災地の現場はとにかく遺体が大変な数。しかも多くの歯科医院も流されて生前の歯の



2003年、アフリカのコンゴ民主共和国を訪問中の曾野さん。

命の現実を見すえたうえで、これからの生き方を問い直す。



写真/荒井孝治

汚れてひどい状況だろうと想像して。ところが、すべてのご遺体がいかに洗われていて、髪の毛にまで通っていた。ご遺体を選んできた消防団や警察などの皆さんがそこまでやっていたのです。それを見た瞬間に、彼は「自分のすべき仕事」がはっきりとわかったそうです。このように、日本人は震災のときに自らを律し、決して乱れなかった。そして、生き方をもう一度問い直さされるような経験をしたのでと思います。

大久保 それは大きな問題です。日本歯科医師会では、日本財団と協力して、歯科撤去物の金属を集めて換金し、ミャンマーの学校建設や、国内の小児がん治療の支援などに役立てる「TOOTH FAIRYプロジェクト」を展開しています。その一環で今、難病の子どもとご家族への支援として、大変な介護を続けている家族を支えるために日本で初めてのレスパイトケア施設の設立にも取り組んでいます。これもまたこうした活動を続けていきたいですね。

曾野 今も、テレビのアナウンサーや選挙の立候補者が「安心してくらせる」なんておっしゃるけれど、私はこうした言葉が嫌いです。どうしてそんなウソがまかり通るんだらうと。明日何があるかわからないし、安心してくらせないのが人生なんです。でもそれを最低限のところで救ってくださっているのが、医療に従事する方々なのだと思います。ですから我々老人の側も、あまり甘えていないで、できるだけドクターのお世話にならないように一人ひとり

歯医者さんのイメージが変わる新番組!

「生きる」の入り口

〜歯科医療は、生活の中へ〜

3/30 sat 午前11:30~ BS朝日

3月2日から5週連続で全国放送中!

提供: 日本歯科医師会